
その勇者、暴走につき

唐揚ちきん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その勇者、暴走につき

【Nコード】

N6311J

【作者名】

唐揚ちきん

【あらすじ】

エロゲが大好きな高校3年生の少年・末堂雄は諸般の事情により異世界に飛ばされる。
剣と魔法と性欲と煩惱のふあたじい。

1・始まりはエロゲと共に

ファンタジー。

それは幻想。存在しえない物。物理的に不可能な事。夢や希望のあふれる世界。

「という訳でファンタジー系新作エロゲ買っちゃったぜ！うひょー
ーーーーーっ」

ゲーム機の前でエロゲのパッケージを見ながらにやけている美少年・
末堂 雄すえどう たけしこと俺は新たな世界しんかくエロゲに胸躍らせていた。

汗水たらして稼いだ金が一つの物に変わる。うん、悪くない。

さあ、早速始めようと思った最中さなか俺の身体に電流にも似た衝撃が襲った。

ティッシュが無い！そう、エロゲをやるには必須と言えるティッシュが無いのだ。

どのくらい必要かというドラ○エ？の虹の雲ぐらい必須だ。

しゃあない。リビングから取ってくるか……。

俺はしぶしぶとリビングに向かうために部屋をでようとしてドアを開けた。

その瞬間。扉の向こうがぐにゃつと曲がってて……はいいいいい！？

目の前がまぶしい光で包まれ、俺の意識はそのまま飛んだ。

「勇者様。起きて下さい、勇者様」

ぼんやりとした俺の頭に誰かの声が聞こえてくる。目を開けると見知らぬじいさんの顔が近距離ニアレンジで見えた。

「オルアアアツ！」

俺はそのじいさんを力の限り引つ叩いた。

「ハフボツツ！」

じいさんは奇声を発しながら倒れた。

「な、何をするのですじゃ、勇者様」

「目開けてキモいじいさんの顔が覗き込んでたら誰でも手が出るわ
！」

「つか、あんた誰だよ。あと勇者って何？まあ高校3年の受験シ
ズンにエロゲやってる俺はある意味勇者と呼べなくもないけども。」

1・始まりはエロゲと共に（後書き）

がんばりますのでどうか見てください。

2・老人には永遠の眠りを（前書き）

タイトル若干変えました。

2・老人には永遠の眠りを

「・・・と言う訳で勇者様に来て頂いた次第で・・・」

えー、現在俺はよくわからない場所ですよくわからないじいさんによくわからない事を一方的に聞かされていた。

いや。一つだけ分かったことがある。

このじいさん絶対ボケてる。だって頭おかしいことほざいてるもん。老化ってマジ怖いな

っーか、その歳で中二病とか痛々しいにも程があるだろ。むしろこのじいさんの方が勇者だわ。

もし俺のじいさんがこうなったら、俺ガチで首吊るかもしんねえ。

「あのさ、じいさん」

俺は魔王がどうこうとか言ってるというか頭が逝っているじいさんに話しかけた。

「何でしょうか。勇者様」

真顔で勇者とか言ってるし・・・。軽くどん引きしたがここで何もしなかったら話が進まねえし。

「ここどこだ？そんであんたは誰？」

「これはこれは申し訳ございません、勇者様。説明が遅れましたな」
じいさんは、こほんと咳払いをし始めた。どうでもいいけど仕種しぐさがうぜえ。

「私はハンベルト国王宮魔導師序列一位シガム・フォルガード・レイドルフと申します。以後シガムと御呼び下さい、勇者様」

・・・大丈夫か？このジジイ。おーきゅーまどーしーとかもうマジ末期だ。どこの漫画から引っ張り出した設定だよ。それとも痛いオリジナルか？

いや、でもよく見るとこのじいさん日本人じゃねえな。衣装もかな

り高そうな服・・・ローブとかいうやつだ。そんでもって今居るこの場所もでかくて西洋風の部屋・・・。

はッ！分かったぞ。

このじいさん、どこか外国の金持ちだ。恐らくは日本でファンタジー系の漫画にでもハマって中二病になって、自分で実際にファンタジーのキャラになりきるためにこんな場所を作った、だが一人だけではやっていても虚しいだけなので、俺を拉致ってここへ連れてきた。

うん。ちよつと強引だが筋は通ってる。

「先程からずっと黙られておられますが・・・どうかされたのですか勇者様？」

じいさんが心配そうな顔で尋ねてくる。・・・よくも人を拉致っておいていけしやあしやと。糞ジジイ許さねえ。

「ウラアアッ!!」

俺は力の限りジジイを殴った。

「ホゲッツ!!」

奇声を上げ吹き飛ばすジジイ。だが俺はまだ動きを止めない。倒れたジジイに馬乗りになり、さらに殴る。

「な、何故？ゲフッ！」

ジジイが何か言ったが無視。

「オラオラオラオラオラ！てめえを裁くのは俺の拳だ!!」
殴る殴る殴る殴る殴るひたすら殴る。

ジジイ・・・お前に明日は永遠に来る事は無いだろう。

2・老人には永遠の眠りを（後書き）

努力はします。ええ、しますとも。

3・異性との出会いは唐突に

「よし。これでいいな」

誘拐犯のジジイをフルボッコにした後、ジジイが持っていた紐ひもみたいな物でグルグル巻きに縛って部屋の隅すみに転がしておいた。一応、息はしてたっばいなので死んでねえとは思う。

それにしても凝こってんな〜、この部屋。魔方陣まほうまじんっばいのもで床に描かれてるし。

「まあ、とにかくこの部屋から出る・・・」

「失礼します」

俺が部屋を出ようとする前に部屋のドアがガチャッと開いた。

ドアの外にいたのは・・・超絶美少女！！

水色の髪と瞳、さらに一瞬CGかと思うほど顔が整ってる。スゲー可愛い。

と、その時俺の本能が警鐘けいしょうを鳴らせた。今すぐそこから逃げろと。正直言つて俺にはその警鐘の意味がさっぱり分からなかったが、今まで本能が俺に嘘をついたことはねえ。俺は本能を信じて、思いつきり真横にジャンプした。

結論から言つと俺の本能は間違っちゃんなかった。

「『水式攻撃魔法・凍結氷槍アイスランス』」

あ・・・ありのまま今起こった事を話すぜ！『美少女が何か中二病的な言葉を呟つぶやいたら、かなりでけえ氷柱こおむすぶが突然現れて俺が五秒くらい前にいた場所に突き刺さった。そして突き刺さった部分から床が凍り始めた』。な・・・何を言ってるのか分からねえと思うが俺も何が起きたのか分からなかった・・・頭がどうにかなりそうだった。

・幻覚だとか妄想だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・。

軽くパニックっている最中、美少女が近づいてくる。ここだけ切り抜いて読めば嬉しいことのはずなのに嬉しくねえ。こつなったら、せめてこの美少女のおっぱいを揉んでから死んでやるぜ！

「うおおおおおおおおお！！おっぱい揉ませろおおおおお
おおおおお！！」

3・異性との出会いは唐突に（後書き）

今回も短いですが大目に見てください

4・選択肢には気をつけて(前書き)

あらずじ

えくと・・・そうあれだ。雄は何か見知らない部屋に居たんだ。

そこで何か・・・そう、そこにいたじいさんを殴った。

それで美少女が・・・あゝ何でもいいや、もう。

4・選択肢には気をつけて

今なんかまともならすじが行なわれなかった気がする。
まあそんなことはどうでもいい。

おっぱいが揉めれば俺はそれでいい・・・それで満足だ・・・。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！」

俺と謎の美少女の間の距離は20メートル。いけるかッ!?

「『火式攻撃魔法・灼熱火球』」
ファイアーボール

謎の美少女が再び中二つばい呪文的な何かを吐くと、今度は巨大な炎の塊が降ってきた。

俺が思ったことは一つだ。

それファイアーボールってレベルじゃねえから!

ヤベエ・・・ど、どうすりゃいい?どすりゃいいんだっ!!

そこで問題だ!この状況でどうやってあの巨大な炎の塊をかわすか?

3択 - 一つだけ選びなさい。

答え?最高にイケてる雄君は突如ご都合主義なパワーに目覚めて炎を消す。

答え?見知らない誰か(女性に限る)が助けてくれる。

答え?普通に死ぬ。現実是非情である。

俺としては、ぜひとも答え?で行きたいところだが、実際そんなうまくいかない事を俺は経験で知っている。

というか何で俺こんな事に巻き込まれてんだろ?家でエロゲやろうとしてただけなのに。誰か説明プリーズ。

まあ、気を取り直して、残りの選択肢は答え？と答え？。だが答え？を選ぶと実質的ゲームオーバーだ。俺の人生が終わる。最後に残った選択肢は答え？。今まで十八年間馬鹿にしてきた中二的ご都合主義に身を任せるのとかマジで嫌だわ。というかむしろ一番無理だろ。

じゃあどうする？まさかの-?? 答え？ 答え？

いいや、違うね。俺が選ぶのは隠し選択肢の答え？。

答え？今ちようど俺の真後ろに転がっている最初に会ったジジイを人質にする、でした。

「おい、ねえちゃん。このじいさんて、ひよっとしてあんたの知り合いだったりしない？」

最初からこの部屋にいたジジイ。突然この部屋に入ってきた美少女。この二人が面識がある可能性がある。俺はそれに賭けた。無論読みが外れれば俺は死ぬ。さあ、どう出る？

「……まあ、及第点ですね」

謎の美少女はそう言つと巨大な炎を消した。は？及第点？何言つてんだ？この娘。

美少女は俺の近くまで来ると片膝をついた。

「私はハンベルト国王宮魔導師序列第二位ヒーティ・クルエム・ラジルアと申します。先程無礼平にお許し下さい。勇者様」

「誠意が足りん。一発やらせろ」

色々ツツコミたかったが、一番突っ込みたいのは俺の股間のマグナムだった。

4・選択肢には気をつけて(後書き)

がんばってるんですよ。これでも・・・

5・セクハラも程々に(前書き)

あらすじ??

どうせ誰もそんなに真面目に見てないからいらないよね。

「だ、からどう・・・した・・・この・・・程度のい、痛み・・・俺に・・・とっ、てはじ・・・褒美・・・みたいなもんだ、ぜ」
いてえ。物凄くいてえ。脳髓が焼かれそうだ・・・。だがよお、あと少し動けば愛いとしのおパンツ様が拝めるんだ。そのためなら俺はこんな痛みどうって事ねえ。

「ふ・・・ふおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！」
全力！前進！！見える、俺の希望パンツ！！！！
死ぬ気で、いやほとんど瀕死で俺はもがく。
もがく。もがく。さらにもがく。そして・・・

「み、見えたぞ！純じゅん・白はく！！」

「貴方何の事を言ってる・・・」
ヒィーティは最初俺が何を言ってるのかわからない様子だったが、俺の視線がどこに向いているのか気付いたらしく、顔を真っ赤に染めて思いつきり俺の頭をガシガシと踏みつける。

「あ、貴方は頭がっおかしいんですかっ！？」

「がっ！あぐっ！ごあっ！！」

薄れ行く意識の中俺は、これもこれでアリだな、と思った。

5・セクハラも程々に（後書き）

もうとにかく自重しない主人公で行きたいと思います。

6・俺がここに居る理由

「勇者様。起きて下さい」

ぼんやりとした俺の頭に誰かの声が響く……って何か激しくデジャブな気がするぞ、これ。

「勇者様……」

あ、今度はヒーティの声だ。あのジジイじゃなくてよかった。

「三秒以内に起きないと燃やします。一、二、三。」「火式攻撃魔法・灼熱火……」

「起きた起きた起きた！もうきっちりばっちり目が覚めました！だから殺そうとすんなって！！」

ガチで命の危険を感じた俺は慌てて飛び起きた。てか、あれ食らったら燃えるどころか骨まで蒸発するだろ。

「チツ……」

「舌打ちされた！？」

ガチで俺を殺そうとしてやがったぞ、この女。^{アマ}

てかよお、ここどこだよ。

いや、冷静に考えたら何でここにいるんだ？俺は部屋でエロゲをやるうとしていたはずだぞ。

あと、さっきからバンバン食らいまくってて深く考えなかったけど魔法って何だよ！？

ふあんたじいか？ふあんたじいなのか？ふあんたじいなのですね？

「どうかしましたか？急に黙り込んだりして」

ヒーティが面倒くさそうな目で俺を見てきた。お前そんなに俺が嫌いなのかよ。

「いやなあ、俺よく考えたら色々と何も分かってないなあと思って

よ。つーか、聞いていいか？」

「私に答えられるものであれば」

「まずここどこ？そんで何で俺こんなところに居んの？あとスリーサイズは？」

「最初のここはどこかという質問ですが・・・」
ツッコミとかは無しっすか。寂しいなあ、そういつの。

「ここはハンベルト王国宮殿の『勇者召喚の間』です。貴方が住んでいた世界と別の世界にあたります」

「な・・・何だつてー」

まあ、どことなくそんな気はしてたけど、取り合えず空気を読んで驚いてみた。空気の読める男、末堂雄。現在彼女募集中。

「次に貴方がこの場所に理由ですが、ハンベルト王国には危機的状況に陥るおちいたびに異世界から勇者を召喚する制度があります。貴方は『今回の勇者』として呼び出されました」

「何そのふざけた制度!？」

はためいわく 傍迷惑以外の何物でもねえよ!

6・俺がここに居る理由(後書き)

テスト期間中なので全然書けてません。

7・倒すべき敵

前回の続きに当たるんだが、ここは異世界だった。

じゃあ何で言葉が通じるんだって感じたがヒーティの話によるとそれは詳しくはわからないが召喚されたときのオマケのような物なんだと。

あと召喚される勇者は皆黒髪で黒目だとか。どんだけアジア人好きなんだよ。ヨーロッパの人デイスってんのか？

何でも俺は危機的状況の打開策としてこの世界に拉致られたらしい。国の危機を自分で解決できない上、あまつさえ違う世界から拉致した人間に助けを求めるとか、マジ舐めてんだろ。汚職政治家だつてもっとマシな政策とるぞ。

そんで今俺はそのファツキンなキング、略してファツキングの前に連れてこられていた。

ファツキングは俺を見ると、いかにも偉そうな口調で語り始めた。

「勇者よ。よくぞこの世界に来てくれた。わしはユーポット・トラース・トミール・ハンベルト。この国の王だ」

いや、てめえが俺を勝手に拉致したんだろうが。何いけしゃあしゃあとほざいてんだ、このオッサン。

「そなたには、人々を脅かす魔王を倒して貰いたい」

魔王とかこのRPGだ、オイ。フーかRPGとか邪道だよな。ゲームはやっぱエロゲっしょ！

でも、漫画とかでよくあるパターンだがその魔王つてのは違う世界から人を一人連れてきただけで何とかなるレベルなのか？

「あのよお王様、一つ言っついていいか？」

俺は異世界召喚物の漫画とか読むたび前から思ってたこと言う。

「軍隊使えや。絶対そっちの方が効率いいだろ」

まさか無いとか言わねえよな。一応国なんだろ、ここ。

俺がそう聞くとファツキングは驚くべき発言をした。

「その発想はなかった!」

ブチっと俺の頭の中で決定的な何かがキレた。

「・・・ちよつとこれ借りるぜ」

「え?あ?ちよつ!?!」

俺は近くにいた兵士から剣を奪い取って・・・走り出した。

玉座にふんぞり返って『倒すべき敵』ファツキングに向かつて。

まずはこの国王をぶち殺す!!

「死にさせええええええええええええええええええ!!」

俺は奪った剣を構えてファツキングを襲う。

狙うは頸動脈!けいどうみやく!ここでキメる!!

7・倒すべき敵（後書き）

大変遅くなりました。スイマセン。

8・牢獄の中（前書き）

雄「今回のあらすじは俺がジャックした。そんじゃ、あらすじい
ぜ。」

あらすじ

ハンサムな少年、雄はクソみたいな理由で異世界に拉致された。

だが、雄は己の運命に逆らうため諸悪の根源であるファッキングに
刃を向けたのであった。

その後俺は兵士どもからフルボッコにされて牢屋にぶち込まれた。いや、だってアイツ等めちゃうや多いんだもん。勝てるかよ。でも16人くらいは剣で思いっきり脇腹ぶっ刺してやったぜ。死んだかどうかは確認ねえが、確実に後遺症ぐらいは残るだろうな。でも俺は悪くないぜ。ちゃんと忠告したからな、心の中で。

そして今現在に至る訳だ。

「むしゃくしゃしてやった。反省はしている。まさかこんな事になるなんて思わなかった。だからここから出せやゴルアア！」
俺は牢屋の扉をガンガン蹴りながら、看守と交渉していた。

看守は俺を睨み付けて怒鳴った。

「騒ぐな！この反逆者が！」

どうやら俺は勇者から反逆者にジョブチェンジしたらしい。ダーマ神殿もクリスタルも要らねえとは流石さすが異世界。

「さーて、どうするかな」

取り合えず、脱獄しなくっちゃいけねえな。残念ながら壁には亀裂とかない。隣の牢屋は空っぽ。

とすると俺が選べる選択肢は二つ。

一つは看守を近くにこさせて、ボッコって鍵を奪って逃げる。

二つ目はひたすら何かイベントが起こるまで待つ。

まあ、二つ目ののは散々待ったが進展しなかったから期待できねえ。

てことはやはり看守から鍵をパクっきゃねえな。

そんな事を考えていると牢屋の外のドアが開いた。

そこから現れたのはなんと、

「クソジジイっ!？」

俺を直接この世界に拉致ってきたクソジジイだった。

8・牢獄の中（後書き）

超スローな展開でいつもすいません。

9・世界のルール（前書き）

雄「嘘あらずじ。

幼馴染のいっしょに遊園地に遊びに行った雄。だがそこで雄は謎の組織の取引現場を目撃するが、組織のもう一人の仲間に気付かず殴り倒されてしまう。

雄を殺すために組織の男が飲ませた毒薬は何故か雄を幼児化させてしまった。組織が知らなかった薬の副作用によって生き延びた雄は正体を隠しながら謎の組織を追うために、周りには雄の親戚、工口川タケナンだと名乗る。

父親が探偵をやっている幼馴染の家に居候し、謎に包まれた『黒の組織』を追うため、探偵として事件を解き続ける」

9・世界のルール

クソジジイ・・・お前、使い捨てキャラじゃなかったのか！

「シガム様っ！？な、何故このような所に？」

俺の感想を他所よそに看守はあたふたと騒ぐ。

そっぴいやこのジジイ、王宮なんちゃらの序列一位とか言ってたし偉いっぴいな。

「済まんが、少し席を外してしてもらえないか？」

「は、はい。わ、わかりました」

ジジイが看守に看守は、最後まであたふたしたままドアから出て行った。

せわしねえな。あんな大人にはなりたくねえもんだ。

そんな事を考えてるとジジイが俺の牢屋に近づいてきた。

「あんだ？クソジジイ。やんのか、コラ」

取り合えずガン付けていると、ジジイは牢屋の扉に触ると何か呪文っぽいものを呟く。

すると鍵が掛かっていた扉が開いた。

なんか理由が分からんが牢屋から出してくれるみたいだ。俺の日頃の行いが良いからだな、うん。

「良くやった、ジジイ。礼は言わねえぞ」

俺は牢屋から出るとジジイを褒めてやるうとジジイの方を向こうした。

その時、俺の生存本能が叫んだ。そのクソジジイは危険だ。ゲロ以下の臭いがプンプンするぜ、と。

「『風式攻撃魔法・裂帛風刃』」
エアカッター

ザバッと空気が裂けたような凄い音がした後、千切れた俺の髪が宙を舞った。

「・・・あくまで『髪だけ』な。」

俺はとつさに床を転がって見えない何かを回避した。

まあ、エアカッターとか言ってたから、風の刃とかそんな感じだろ。

「殺す気が！？クソジジイッ！！」

前にボコボコにして縄で縛りあげた事根に持ってんのか？

クソジジイは最初に会った時とは別人のように言った。

「その通りだ。御主には死んでもらう。国王を殺めようとするような出来損ないの勇者をこの世界に召喚してしまったのは私の落ち度だ。せめて私自らの手で葬ろう」

ああ、ファッキングの件か。てかキャラ違くないっすか！？

ヤバイ。狩る者の目をしてやがる。マジで俺を殺す気だぞ、このジジイ。とにかく説得しねえと・・・。

「お、落ち着けジジイ。ほ、ほらまた新しく勇者を異世界から拉致つてくりゃ良いじゃん。あからさまに正義感が強くて、お人よしそっなの勇者をさ」

「・・・この世界に存在する事ができる勇者は一名のみ。既に勇者がいる場合は、その勇者が死ぬまで新しい勇者は召喚できないのだ」

何そのルール！？

9・世界のルール（後書き）

短いですが早めに更新するよう心がけています。

10・選ぶのは生か死か

「覚悟はいいか？王に仇^{あだ}なす勇者よ」

クソジジイは淡々とした口調で俺に聞いてくる。

やべえ。まだできてないって言ったらもう少し時間稼げたりするか
なあ……。

絶対絶命だ。俺はこんな小汚いクソジジイなんか殺されちまうのか？

……いや、まだだ。まだ童貞も捨てない内に死んでたまるか！

一か八か、やるっきゃねえ！！

「じいさん。一つだけ頼みを聞いちゃくれねえか？」

「命^ご乞いか？悪いが応じる訳には……」

クソジジイが台詞を最後まで言い終わる前に、俺は言った。

「ちげーよ。そんなんじゃないよ。だだこれを……ヒーティに渡して欲しいんだ」

俺はポケットに入ってた星型のキーホルダーを取り出した。

クソジジイは怪訝^{けげん}そうな表情をする。

「ヒーティ？王宮魔導師序列第二位のヒーティ・クルエム・ラジルアの事か？」

「ああ。そうだよ」

「何故だ？」

「……野暮^{やぼ}な事聞くんじゃねえよ。男が女にプレゼントする理由なんて決まってるだろ？」

クソジジイは少しの間、黙り込むと俺の方へ近づいてきた。

「分かった。私が責任を持って彼女に渡すと誓おう」

「ありがとな、じいさん・・・」

俺はキーホルダーを乗せた手をクソジジイへ伸ばす。

「善人ばかでいてくれて」

「な・・・っ！」

そのまま拳を握り、思いつきりクソジジイにアッパーをかます。

油断していたお陰で紙くずのように吹っ飛ぶジジイ。

だが、俺は容赦しねえ。クソジジイが反撃する前に馬乗りになって、喉のどを驚掴わしづかむ。

魔法とか言う物がどんな原理で成り立ってんのか知らねえが、多分言葉がトリガーになってるはずだ。

だったらそいつを封じふうちまえばいい。こんな風にな。

「なあ、クソジジイ。この状況でもお得意の魔法とやらは使えんのか？」

「ぐ・・・が・・・」

喉のどを掴つかんでるせいで声がまともに出ないが、表情を見てるだけでクソジジイの思ってる事が大体分かる。

『よくも騙したな。このクソガキっ』

まあ、そんなとこだらうな。

さて、このクソジジイをどうすっかな。

見逃すか？

いや、論外だ。そんなことして、わざわざ報復のリスクを作る必要がねえ。

そんじゃ、俺がやる事は一つだ。

「クソジジイ。てめえ・・・『覚悟して来てるヤツ』だよな・・・
・・・だよな。人を『始末』しようとするつー事は、逆に『始末』されるかもしれねえつー危険を、常に『覚悟して来てるヤツ』ってワケだよな・・・」

「や……め……」

クソジジイは俺がマジで殺^やるつもりだと理解したようで、必死で逃げようともがくがマウントポジションにいる俺からは逃げられない。

「じゃあな、クソジジイ」

俺はクソジジイの喉を掴んだ腕に、力を込める。

ゴキッと鈍い音がして、クソジジイの首がおかしな向きに曲がった。今までもがいていたのが嘘のように動きが完璧に止まった。

俺は、クソジジイを殺した……。……。……。良い子のみんなはジジイを大切にね

10・選ぶのは生か死か（後書き）

主人公が制御できない。

11・牢獄からの脱出(前書き)

雄「あらすじ。なんかジジイ殺した。以上」

11・牢獄からの脱出

俺はたつた今、自分の手で殺したクソジジイの死体を見つめる。

「俺が・・・殺した・・・？・・・人を・・・生きている人を・・・」

あゝ、駄目だな。悲劇の主人公きどつてみたけど全然罪悪感とか感じねえ。あんなクソジジイの一匹や二匹、殺やったところで良心なんざ痛みやしねえしな。

「まあ、何はともあれ助かったワケだ」

さてと、じゃあRPGでは鉄則の死体したいあさ漁りでもしますかね。なにがあるかな　なにがあるかな

五分くらい漁った結果、出てきた物は古い大きな鍵だけ。・・・シケてやがるぜ。

折角せうかくだからジジイが着てたローブももらっておくか。何かファンタジー効果があるかもしれねえし。

俺はクソジジイの身包みをはがすと、ジジイの死体を壊れた牢屋にぶち込んむ。

「そおい！」

死体は壁にぶつかって、ベチャッと嫌な音をたてた。

俺はクソジジイの着ていたローブを服の上から着てみる。なかなかいい感じだな。通気性もあるし。

何よりフードが付いてるから、顔が隠せる。

そんじゃ、こんなところには用はねえし、さっさとおさらばするとしますかねー。

そう思つて部屋から出ようと思つた瞬間、爆音が鳴り響いた。

「うお！な、何だ」

床がグラグラと揺れる。壊れた牢屋の中ではクソジジイの死体がグニャグニャとタコのように力なく転がる。

うげっ、キモ！

俺が吐きそうになつていた時、部屋の扉が勢いよく開いて、看守が飛び込んできた。

「シガム様！大変です！！城内に魔物の大群がつ……お前！どうやって牢屋から……」

「じゃかしいわ！ボケエ！！」

看守はすぐに俺に気付いたが、俺はダツシユで近づいてドロップキックをぶちかました。

「ウゲオっ……」

看守は扉の外まで吹き飛んで気絶した。

ふゝ、モブキャラ風情がでしゃばるから、そうなるんだよ。クソが。にしても魔物ねえゝ。やつぱいるんだ。流石は異世界。

ハッ！まずい。このままでは、ファッキングが魔物に殺されてしまふ。

させねえ、絶対にそんな事させねえ！

俺は部屋を出て廊下を走る。幸い、この場所からファッキングがいた場所までのルートは、兵士どもが俺を引きずって運んだ時に覚えてる。

待ってる、ファッキング。てめえを殺すのは魔物じゃねえ！この俺だ！！

11・牢獄からの脱出（後書き）

相変わらず、文章レベルが低くて、主人公が言う事を聞いてくれないが、何とか話を紡ぎます。

12・未知との対話(前書き)

雄「あらすじだろ？んなモンどーでもいいんだよ。こんなつまんねえ小説、誰も読みやしねえんだろっからよ」

かあゝ、耳がいてえ。

俺は耳を塞いでその方向を見た。

でかつ！

そこには三メートルくらいの巨人がいた。

あれが魔物つて奴か？まあ、少なくとも人間じゃないだろうな。仮に人間だったら、ドン引きだ。

でも人型なら、何とか意思の疎通ができそうな感じがする。そんな気がするぜ。

そんな事を考えてたら、巨人の顔が俺の方に向いた。

・・・あゝ。駄目だこりゃ。だつて・・・。

ギョロリと大きな眼球が俺を捉える。

こいつ、目玉が一つしかねえもん！！

いや、まだだ。俺のこみにゆけーしよん力を見せてやるぜ。

「う、うぼあ・・・？」

取り合えず、言葉は通じそうにないので一つ目の巨人が叫んでいた
鳴き声をまねしてみた。

さあ、どう出る？

12・未知との対話(後書き)

いつにも増して短いです。しかし、私は謝らない！

13・掴み取る勝利（前書き）

雄「前回のあらすじ。なんか一つ目の巨人に会った」

13・掴み取る勝利

「ウボアアアアアアアッ！」

一つ目巨人さんは、俺の呼びかけに拳で答えてくださった。さっすが魔物！そこに痺れる憧れるう！

「って、んなこと言ってる場合じゃねえ！」

俺はその場で後ろに思いつきり飛んで回避した。自分で言うのも何だが正に神回避だったぜ。

だが、勢いが強すぎて、尻餅をついちゃった。

一つ目巨人の拳は俺が避けたせいで、壁にめり込んでいた。巨人は無造作に腕を引き抜くと壁は豆腐のように崩れる。

あんなの食らったら、死ぬ・・・っ！死んでしまう・・・っ！圧倒的即死・・・っ！

ゲームで例えるなら、モン○ターハンターの世界の中に連れてこられたスペランカー先生みたいな感じだ。

俺がそんな下らない事を考えていると、一つ目巨人は再び腕を振り上げた。

やべえ！尻餅ついてるから回避できねえっ！！

「ウボアアアアアアアアアッ！」

「た、太陽拳っ！！」

とっさにポケットから携帯を取り出して、カメラを作動させ、フラッシュをたいてやった。

「アアアアアア・・・ッ」

一つしか無い目でフラッシュをもらに受けたせいで、巨人は両手で顔を押さえて涙を流しながら苦しんでいる。

付いてて良かった、カメラ機能。カメラ付き携帯バンザイ！

「さて、と」

この状況で普通のやつなら一つ目巨人が視力を失ってる内に逃げる。大抵、そう考えるだろう。

だが、俺は違う。

敵は殺れる時に殺る。それが末堂雄の人生哲学。

この巨人には弱点がある。男いや、オスである限り、逃れられない弱点をぶら下げている。

そう。すなわち金玉。

「ってワケで食らえや、オルアアアツ!!!」

俺は全身全霊の力を込めて、後ろ回し蹴りをがら空きの股間に叩き込む。

ゴリユツと変な音と共につま先で、何か柔らかい物を潰した手こたえを感じた。

「ウボオツ!!!ア・・・」

真後ろに崩れ落ちるように倒れる一つ目巨人。よく見るとびくびくと細かく痙攣している。気絶しているから、このまま放って置いても問題はないだろう。だが。

「何勘違いしている。俺のバトルフェイズはまだ終了しちやいないぜ！」

俺は近くに転がってる兵士の死体から、剣を奪う。

そして、それを振り上げて、倒れている巨人の喉元に力いっぱい刺した。

巨人の喉元から、あり得ない程の緑色の液体が飛び散った。

「へっ、きたねえ噴水だぜ・・・」

これで完璧に一つ目巨人は死んだな。

勝った・・・。

俺の全身から、押さえきれない感情が溢れ出してくる。
この手の異世界物にありがちなチート臭い能力も、ご都合主義で底上げされたような身体能力も無しで、自分だけの力だけで勝利を掴み取った。

「ヒヤハハハハハハ！最高にハイってヤツだぜえ！」

13・掴み取る勝利（後書き）

大変遅れてすみません。

14・迷える狂気(前書き)

雄「前回のあらすじを二単語で表すと」
テキ タオス
」

・・・聞き覚えのある嫌な叫び声が聞こえた。
つてこれあの一つ目巨人の鳴き声だよな！またエンカウントか？勘
弁しろよ。

「おおおおッ！」

ん？何か今、人間の声も聞こえた気がする。

取り合えず聞こえた方向に行ってみるか。ヤバそうだったら、戻っ
てくればいいし。

声が出た方向に行くと、一つ目巨人と兵士が熱いバトルを繰り広げ
ていた。

一つ目巨人は体中傷だらけでボロボロ。対する兵士も鎧よろいが壊れかけ
ていて、辛からうじて剣を構えている。兵士の周りには他の兵士の死体
が7、8体転がっていた。

「ウボアアア！！！」

一つ目巨人の巨大な拳が兵士に迫る。

「せいっ！」

兵士はそれをなんとかかわして剣を一つ目巨人の心臓に突き刺した。
一つ目巨人はグラッとよろめいて、床に倒れた。
兵士の方も限界だったようでその場で膝を付いた。

ほぐ。やるじゃねえの、この兵士。弱ってたとはいえ、あの一つ目
巨人を真正面から倒しやがった。

俺はその兵士に近づいて行って、ある事に気付いた。

・・・こいつ、俺がファツキングを殺そうとした時に他の兵士ども
を率いて、俺をフルボッコにした兵士じゃねえか！

よく見れば、壊れた鎧もなんか普通の兵士の鎧と違う。多分、それ
なりに偉い立場の兵士なんだろうな。

・・・殺やつちまうか？殴うられた恨うらみもあるし。

俺が兵士を殺そうか迷っていた時、突然その兵士が俺に向かって言った。

「・・・シ、シガム様！シガム様ではないですか！！」

シガム？ああ、さっき俺が殺したクソジジイの事か。あゝ、そういや俺あのジジイからパクったローブ着てんだっただけ。

調度いい。こいつを騙してファツキングの居場所を聞き出せばいい。

「・・・国王様は今どこに？」

俺はクソジジイの声真似をして兵士に聞いた。うん、自分で言うのもなんだがかなり似てる。

14・迷える狂気（後書き）

テスト5日前なのにこんな事してます。赤点街道まっしぐら。

15・騎士の道(前書き)

雄「あらすじ。前回を見ろ」

15・騎士の道

「王は・・・王は姫と共に地下の聖堂に・・・」

「姫？あのファッキング、娘がいたのか！？まあ、どうせファッキングに似て不細工だろうし、親子共々まとめて血祭りにあげてやろう。兵士は瀕死ひんしの身体に鞭むちを打って、俺に情報を伝えてくれた。」

「私の・・・後ろにある床の・・・地下の聖堂につながる隠し扉は・・・守り抜き・・・ました。鍵はシガム様がお持ちになっていたはずですよ。王を・・・そして姫を守ってください・・・」

鍵ってクソジジイが持ってたあの鍵か。いや、それにしても本当にいい事教えてくれたわ、こいつ。

にしても、馬鹿だな。背格好とか声で俺があのクソジジイじゃないことくらいわかりそうなモンだけだな。そんな事も気付けない程こいつの身体はボロボロなのか。

そんじゃあ、そんなこいつに絶望ってヤツをプレゼントしてやるか。

「なあ、お前にいい物を見せてやろう」

俺の言葉に兵士は聞き返した。

「いい物・・・ですか？」

「ああ、よく目に焼き付ける・・・」

俺は深く被っていたローブのフードを勢いよく脱いだ。

「これが俺のハンサム顔だ！！」

「なっ！・・・お前は王に牙を剥むいた・・・勇者・・・」

兵士の顔は先ほどの己の役目を果たし終えた満ち足りたから、一変して絶望の色が刻しまれた。

やっぱり仕返しかえしつてのは気持ちが良いぜ。俺はさらに兵士に追い討

ちをかける。

「安心しろよ。てめえが命を賭けて守ろうとした王様もお姫様も魔物になんか殺させねえ。俺がこの手で殺す。居場所を教えてくれてアリガトウなあ！」

多分、こいつをこのまま殺しちまっても俺は罪悪感なんて沸かないだろう。俺が唯一この世界に来て学んだことは「人の命ってぶっちゃけそれほど重くねえ」って事だ。

だけど、別に俺も殺人鬼ってワケでもない。殺すのは俺の命が懸かった時とどうにも我慢ならねえクソ野郎がいる時だけだ。

「ってワケで殺しはしねえよ。放って置いてもどうせてめえは死ぬだろうしな。せいぜい残り少ない人生を後悔しながら、そこで朽ち果てな」

俺は膝を着いて絶望してる兵士を無視して、そいつの後ろにあるらしい地下への隠し扉を探す。

床をじっくりと見ていくと、何か窪みくぼのようなものを見つけた。

「これは・・・鍵穴か？」

俺がクソジジイから、パクった鍵を突っ込んで回すと床の一部が開いて、地下への階段が現れた。どうでもいいけど「つつこんでまわす」ってエロい表現だよな。

さて、そんじゃファッキングをぶち殺しに地下の聖堂とやらに行きますかね。

俺が階段を下りようとしたその時、ドサッと音が背後から聞こえた。振り返って見ると、膝を着いていた兵士が倒れていた。

とうとう身体の限界が来て死んだかと思っただが違った。口元から異常な量の血を垂れ流して死んでいたからだ。

こいつ、舌を噛み切って自殺しやがった。

己の犯した失態の責任を取り、誇り高く自害する。これが「騎士道

精神』ってヤツか……。俺は心の底から思った。

なんつークソ野郎なんだろうと。

本当にファッキングやお姫様とやらを助けたいと思ってたなら、は這い蹲つくはってでも俺を止めるべきだろ。それをこいつは自分の誇りを優先して自殺した。

クソ野郎以外の何者でもねえ。

まあ、でもてめえが『騎士道精神』っての、見せ付けてくれたんだ。だったら俺もこた応えてやらなくちゃな。

「『下衆道精神』でな」

16・真つ赤な聖堂（前書き）

雄「あらすじ。アホな兵士が自殺した」

16・真つ赤な聖堂

ていろりろりん。

たけしはがんじょうそうなこてをてにいれた！

まあ、ゲーム風に言ってもただの死体漁りだけだな。

今、俺は騎士の誇り（笑）のために自殺した兵士の死体を漁っていた。

剣や鎧はボロボロでお話にならなかったが、幸い籠手だけは比較的綺麗だったのでパクることにした。

死んだ後に自分の籠手が、自分が守りたかった人間を殺すために使われる。この兵士には耐え難い屈辱だろうな。

だが、死後すらも冒流する。それが下衆道クオリティ。

さして、そんじゃ地下の聖堂とやらに行きますかね。

俺は床の隠し階段を一段一段慎重に下りていく。

てか暗えな。松明ねえのか、松明。ドラク○？ですらあったんだぞ。ブツクサ言いながらも、下の方に下りていくと明かりが見えてきた。

階段の下は狭い通路の先に続く扉があった。

どうでもいいけど地下とは言え、仮にも城の聖堂にしちゃあシンプル過ぎじゃねえか？

まあ、そんな事は置いといてだ。主役の登場にはやっぱりインパクトが必要だよな。

俺は扉の前に立つと、思いつきり助走を付けて、

「ダイナミックお邪魔します!!」
飛び蹴りをぶちかました。

扉は勢いよく開き、俺は聖堂の中にゴロゴロと転がるように飛び込む。

「ヒヤッハー！ファッキング、ぶち殺しに来てやったぜええええッ
！！」

そのままハンドスプリングして立ち上がり、ポーズをビッシと決める。

「覚悟しなッ！！……ってなんだこりゃあ？」

赤。

赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤……見渡す限り真っ赤。

聖堂の中は、おびただしい赤で彩られていた。

むわつと鼻腔に鉄くさい臭いが広がった。

「ごほっ、がはっ……」

俺は思い切りむせた。

これは血だ。血の臭いだ。よく見ると周りに死体、いや死体だった部品が転がっている。

腕、足、頭……ぱつと見てある程度原型を留めているのはそれくらいで後はぐちゃぐちゃした赤い物としか言えないものばかり。

「う……ぐえ……」

喉の奥から込み上げてくる酸っぱいものが逆流するのを、なんとか堪える。流石の俺でも吐くかと思った。

だが、聖堂の奥にある巨大な十字架に張り付けられた死体を見て、

16・真つ赤な聖堂（後書き）

最近、自分に文才がないことを実感します。

17・三つの質問（前書き）

雄「あらすじ。異世界のリフォームって斬新だな」

17・三つの質問

ピチャピチャ……。

「……ん？」

胃の中の物を全て吐いた俺は、近くで何か変な音が音かしていることに気付いた。

ピチャピチャピチャピチャ……。

猫が水を飲むときにする、何か液体をなめるような音。

「そこだあつ！！」

俺は落ちていた人間の千切れた足首を、聖堂に並んでいる椅子の陰にぶん投げた。

椅子の陰にいる『何か』に千切れた足首がぶつかる寸前、そこから白く細い腕がスツと伸びる。

腕は千切れた足首を掴むと、いとも簡単に握り潰した。

椅子の陰にいた『何か』は、立ち上がり俺の方を向いた。

「マジ……かよ……」

俺は自分の目を疑った。だってそうだろ？俺の目の前に現れたそれは。

「あなたはだくれえ？」

俺の目の前に現れたそれは……金髪の女の子。それもかなりの美少女。年は14、5くらい。

超可愛い……。抱きたい。

「俺はその十字架に磔はりつけになつてる死体ファッキングに、この世界に無理やり連

れてこられた拉致被害者の末堂雄だ」

「まあ！あなたがおとーさまが、このせかいによんだゆうしゃさまなのね？」

金髪の女の子は口の端についた赤い液体をペロリとなめて言った。

ん？こいつ今なんつった？

おとーさま、だと！？って事はこいつはファッキングの娘！！？ありえねえ。あの豚からこんな可愛い娘が生まれてくるなんて……。う、うちゅうのほうそくが乱れる。DNAの神秘ってレベルじゃねーぞ。

「異世界恐るべし、だな……」

「？」

金髪の女の子は、俺の言ってることの意味が分からず首を傾げている。ヤベエ、マジ萌える。

「それでお前の名前は？」

「わたし？わたしはシエリス。シエリス・メリア・リズ・ハンベルト。シエリスでいいよ」

俺はできるだけ優しい表情を作る。

「それじゃシエリスたん。三つだけ俺の質問に答えてくれるかな？シエリスは俺にっこり笑って頷いた。

「うん。いいよ」

「まず、一つ目の質問。シエリスたんのおっぱいの大きさは？」

「うん。はかったことないから、わかんない」

そうか・・・この世界じゃおっぱいの大きさは測らないのか。俺の見立てではCカップくらいだと思うが。

「じゃ、二つ目の質問。シエリスさんの『自主規制』に毛は生えてる?」

「うぶげなら、すこし」

いいね〜!そのくらいが一番だよ。あんま濃いと引くし。

「さて、シエリスたん最後の質問だよ」

「うん。なにがききたいの?」

俺はシエリスの腕を掴んで聞いた。

「ここにいた奴らを皆殺しにしたのは、てめえだな?・・・」

17・三つの質問（後書き）

夏休みなので、できるだけ早く更新します。

18・壊れた笑み（前書き）

雄「あらすじ。少女にセクハラをした」

18・壊れた笑み

あの惨劇の中でこいつだけ生き残ったとは、考えられない。そしてこいつは血をなめていた。

「うん。そうだよ。わたしがやったの」

シエリスは悪びれることも無く、笑顔で俺に答えた。

「おとーさまも、せんせいも、しんぷさまもーんなわたしがころしたの。すごいでしょ？」

わく、めちゃくちや病んでる。ファツキングの娘のことだけはあるぜ。

「つか、大の大人をここまで分解ぶたせるなんて、ただの女の子にできるわけねえ。こいつ人間辞めてないか？」

「かみさまがね。わたしにちからをくれたの。わたしはずっとがんばってきたから、ごほうびをくれたの」

『神様』、ね。一つ目巨人どもがこの城に侵入してきたのも、そいつが手引きしたのか？だとしたら、何が狙いだ？ファツキングの命か？それともこの城にある宝か何かか？

もしかして……勇者おれの命か？

可能性としては、それが一番高い。魔物が動いてるんだから、黒幕は魔王とかだろう、多分。災いの芽は摘んでおくに越したことはないってか？やってくれるな、オイ。

俺が考えてると、シエリスは俺が掴んでいる手に力を込めながら笑う。ヤベエ、俺の本能が警鐘けいしゆを鳴らしてやがる……。

シエリスの爪が突然、異様に伸びる。

18・壊れた笑み（後書き）

なかなか話が思うように進みません。どうしたらいいでしょう。

19・喧嘩の経験(前書き)

雄「前回のあらすじ。ケータイぶっ壊されてキレた」

19・喧嘩の経験

「ヒャッハー！死ねい！！」

俺はローブの下に隠し持っていた一つ目巨人を殺した時の剣を抜くと、シエリスを斬りつける。

だが、シエリスは鋭く伸びた両手の爪で、それを難なく止める。

「わたしをころす？むりだよ。ゆうしやさま、よわいもん」

シエリスは爪で剣を押し返しながら、俺との距離を縮めてくる。

「確かにてめえの方が腕力は上みてえだが」

俺は握っていた手を放した。

爪に力を込めて剣を押し返していたシエリスは、当然前のめりなる。

「え？あれ？」

「喧嘩の経験がちつとばかりし足りねえな！」

俺は身体をシエリスの斜めに移動して、籠手つきの拳をシエリスの側頭部にぶち込んだ。

予想以上に軽かったシエリスの身体が、並んだ椅子の方に飛んでいく。

俺は落とした剣を即座に拾うと、シエリスに追撃する。

シエリスは逃げようと身体をよじらせるが、椅子と椅子の間の通路に挟まっていて、うまく動けない。

「もう遅い！脱出不可能だぜッ！無駄無駄無駄無駄無駄アーーーーッ」

剣を逆手に持つと、俺は何度も何度も振り上げては突き刺す。

ドシユドシユドシユドシユドシユドシユドシユドシユドシユドシユッ！！

元のシエリスの原型が分からなくなるまで、剣で突き刺しまくると

手を止めた。

「ふう・・・グロいな」

今、思えば適当に騙だましてレイプしてから殺せばよかったな！。もっ
たいたない事しちまつたぜ。

罪悪感は少しも沸わかなかつたが、残念感ガツカリで俺の胸がいつぱいだった。

「取り合えず、これから何をするか考えなくっちゃな」

殺やるべき事はやったし、これといってする事が浮かばない。普通の
ヤツなら、元の世界に帰りたいとか思うんだろうけど、俺はそれほ
ど元の世界に思い入れはない。

それよりこの世界を見て周るとかの方が面白そうだし。

まあ、この城からは出て行くとして・・・あ、そうだ。

金。この世界の金が必要だ。先立つ物がねえと始まらない。よし、
この城の宝物庫のお宝をかつばらおう。そんな位は、許されるだろ。
もう持ち主も死んでるしな。

宝物庫の場所が分からないから、この城で生き残りを探して、そい
つに案内させよう。

だが、問題は魔物だ。あいつ等の目的は多分俺だ。どうにか切り抜
けねえといけねえな。

俺が今後の事を考えてると、背後に何かの気配を感じた。

「『私、メリーさん。今あなたの後ろにいるの〜』ってかッ？」
振り返ると同時に俺は力一杯剣を振り抜く。

が、振り向いた瞬間、剣は砕かれた。

「なッ!？」

俺の剣を砕いたそいつは、グシャグシャに潰つぶれた顔に笑みを浮かべ
た。

「ひどいな、ゆづしやま。とつてもいたかったよ？」

19・喧嘩の経験（後書き）

主人公に特別な能力を付けるべきか迷っています。どうしたらいいでしょうか？

良かったら、アドバイス下さい。

20・ありのまま起こった事

あ……ありのまま起こった事を話すぜ！

『俺はシエリスを剣でズタズタにした殺したと思ったら、いつの間にか後ろに立っついていて、振り返った俺の剣を砕きやがった』。

な……何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

打たれ強いだとか頑丈だとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

「ほんとうにいたかった。でもさすが、ゆうしゃさま。わたしもほんきをださないとね」

マジかよ。あれで手加減してたっのか？笑えねえ。っーか、何であれで死んでねえんだよ。ゾンビか？バイオハザードなのか？シヨットガン持って来い、シヨットガンを。

「ハッ！本気を出すうー？オイオイ、もつと正直に言えよ。『必死です』って。『私は今ハンサムな雄さんに負けそうなので必死こいてがんばります』ってよお！」

悪魔で余裕の表情で俺はシエリスを見下す。ここで弱気になったら、それこそ終わりだ。絶望的な状況の時こそ、啖呵たんかを切る。それがこの俺、末堂雄。

「あははははは。そんなこといつてられるのもいまのうちだけだよ。ゆうしゃさま」

シエリスの背中から何かが飛び出した。

それは蝙蝠こもじのような二対の真つ黒い翼だった。
変な言い方だが、純粹な黒とは違う、血が乾いて固まったような汚れた黒。

その黒い翼がシエリスをすっぽりと覆おおい隠す。
まるで虫の蛹おきなや繭まゆのように見えた。

まさか・・・第二形態になりますってか？

「させるかよ！クソツタレ！」

俺は刃が砕けて使い物にならなくなった剣を捨てると、そのまま黒い翼を殴りつける。

ゴムを殴ったような鈍い感覚がして、俺の拳は弾はじかれた。
籠手を着けてるせいもあるが、拳に痛みは感じなかった。
だが、同時に手応えも全く感じなかった。

「・・・それじゃ、いくヨ。ユウしゃさま」

歪いびつな声と共に黒い翼が開き、俺は弾き飛ばされた。

後ろの壁に背中から思い切り激突して、気を失いかけた。

「ゴフアツ・・・」

くらくらする頭を押さえて立ち上がった俺は、シエリスの姿を見て笑った。

飛び出た牙。かつての比じゃないくらいに凶悪になった手足。そして黒く大きな翼。

どこに出しても恥はにかみかしくない化物がそこにいた。

「・・・随分ずいぶんとベツピンになったじゃねえの。十字架たじくわに磔はりつけになつてるためえの『お父様』も鼻が高いんじゃないか？」

ヤベエな。詰んだわ、これ。

20・ありのまま起こった事（後書き）

次の展開が思い浮かびません。
詰んだか、これ。

21・脳裏に浮かぶ記憶（前書き）

雄「恋愛物のアニメや漫画とかでさ、メインヒロインじゃない幼馴染しゅじんこうって報われねえよな。いきなりポツと出てきた女メインヒロインに好きな男横から奪われるんだぜ。そりゃ病んでも仕方ねえよ」

俺があたふたしてる間も触手はシエリスの爪は拮抗きっこうしている。
グツと触手が爪を押し返した瞬間、俺の身体から何かがまた出てきた。
人間大の大きさの巨大な触手と同じ色をしたヒトデ。
よく見ると、俺の身体から直接生えていたと思っただ触手はヒトデから生えている。

このヒトデはあれか？俺に目覚めた能力みたいな物か？ジヨ○ヨで言うところのスタンド的な物なのか？

試しに触手の一本に動くように念じてみる。すると、触手は俺の思った通りに動いた。

原理はよくわかんねえが、この触手ヒトデは俺の意思の通りに動く。つまり、『キタ！これで勝つる！！』と言うワケだアー！

そうだな。触手ヒトデじゃ言い難にくいから『星スターの白金プラチナ』をパクって『海星スターの十八禁アダルト』と名付けよう。

「ひやははは、スターアダルト！シエリスの腕をへし折れ！」
俺が命じるとスターアダルトはシエリスの右腕に数十本の触手が絡からみつかせる。

メキメキと音をたてながら、シエリスの右腕のシルエットが飴細工あめのようにグニャグニャに曲げられていく。

「アアアアッ！イタいいタイいいタイイタイよオオオー！！」
シエリスは激痛で叫びを上げながら右腕に絡みつく触手を、反対側の腕で引き剥がそうとしている。

剣でぶっ刺した時は悲鳴も上げなかったシエリスも、腕を折られるのは痛いらしい。どういう身体の構造してんだよ。

21・脳裏に浮かぶ記憶（後書き）

何とというか・・・その・・・やっちゃった感が否めません

22・途絶える血脈（前書き）

雄「ポケモンで、HPが一の状態は普通で、ゼロになると瀕死になるよな。でもよおHPがーって事は言い換えれば瀕死じゃねえのか？ゼロって死亡じゃねえか！」

22・途絶える血脈

「イぎいいい……トれナイとレナイイ」

右腕を締め付ける触手をシエリスは必死で引き剥がそうとしているが、爪が長くて鋭すぎるせいでうまく剥がせていない。

そりゃそうだろう。なんたって下手すりゃ自分の腕ごと切り落とすちまうからな。最大の武器が最大の弱点とはよく言ったモンだぜ。

だが、俺はここで手を休める、いや触手を休めるつもりはさらさらねえ。

「スターアダルト！腕の肉を突き破ってシエリスの身体の中へ侵入しろ！」

触手はドライバーのように回転しながら、ズブズブとシエリスの腕に潜っていく。

「アギイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！」

シエリスは、さっきとは比べ物にならない程の絶叫を上げる。

「ひやははは。姿に似合わずイイ声で鳴くじゃねえか！俺は思わず勃起しそうになったぜえ！！」

傍から見ればどっちが悪者かわかったモンじゃねえな、こりゃ。

まあ、最近はダークヒーローの方が人気な時代だからいいか。

スターアダルトを通して触手の感覚が俺に伝わってくる。どうやら触手は目的の場所にたどり着いたらしい。

そこは誰もがご存知、生物の急所中の急所。

そう、心臓だ。

触手が温かく脈打つシエリスの心臓に直接触れる。

「うぐア・・・」
シエリスは形容しがたい悲鳴を上げる。その醜く崩れた顔からですら、生理的嫌悪感から来る恐怖が十分読み取れた。
例えるなら昔、弟に無理やりゴキブリで溢れたプールに突き落とし、てやった時の、弟の表情に似ている。
「これがためえの心臓か。ビクンビクンといやらしく脈打っているのがよくわかるぜ？」

触手から伝わる感覚のお陰で、目でみるよりはつきりと心臓の形が分かる。

ほうほう。ここが大動脈で、こっちが大静脈か。それほど人間と違いはねえんだな。

人生で使う事のないと思っていた生物の知識を、まさか異世界で使う事になるとは、高一の時俺に生物を教えていた教師の山田も思っていないかっただろう。

「いや・・・たすけて・・・おねがい・・・」
完全に生権与奪が俺にある事を悟ったらしく、涙を流しながら命乞いをしてくるシエリス。
俺はそんなシエリスに笑いながら言ってやった。

「祈れよ。ためえのカミサマとやらにな！」

触手が心臓を完全に潰す。

その瞬間、シエリスの身体が砂のように崩れていった。

完全勝利。そして忌々（いまいま）しいファッキングの血も途絶えた。ファッキングには直接手を下せなかったがこれで良しとしよう。あとはこの城のお宝を頂いて、まだ見ぬこの世界の娑婆に繰り出す

ただだぜ。

・・・いや、まだ一人だけ俺にナメた真似まねしたヤツがいた。

「ヒートイ・・・」

生きてるかどうかわらねえが、もし生きてたら徹底的にぶち犯してやる！

22・途絶える血脈（後書き）

感想を送ってきてくれた方々、どうもありがとうございました。
できるだけ、返信するのによければ、どんどん送ってきてください。

23・後悔と引き換えに得た物（前書き）

雄「ギャルゲーとかエロゲーの親友キャラに悪いヤツはいねえ!!」

23・後悔と引き換えに得た物

俺は改めて聖堂の中を見渡す。

酷い。

これはいくら何でも酷すぎる。あまりにも救いがない。こいつはどうしてここまで酷い事を、されなくちゃならねんだ。こいつが何か悪い事でもしたのかよ。誰か教えてくれよ。

血で汚れる事も構わず、俺はバラバラになったそいつをかき集める。もう元には戻らない事は知っている。だが、どうしても放って置けなかった。

「畜生^{ちくじゆう}。何でだよ・・・」

仇^{かたき}は討ったなんて言葉は何の意味もない。

失って初めて気付いた。

気付いてしまった。

もう、どうしようもなく、手遅れなのに。

「何で壊れちまったんだよ！俺のケータイイイツッ！！」

と、五分くらい悲しんだ俺は、あっさり立ち直ると血でべとべとに汚れたTシャツと腰の部分が切り裂かれたGパンを脱ぎ捨て、地下の聖堂から出た。

スターアダルトは、触手をシウルシウルと縮めると俺の身体に吸い込まれるように消えた。自分の身体に触手の生えたヒトデが入っていくのは、かなりシユールだった。

ふう・・・清々（すがすが）しい。さつきまで血なまぐさい聖堂にいたからなく。空気がうまい。

まあ、ここも兵士どもや一つ目巨人の死体が転がってるとは言え、あの聖堂よりは遙かにマシだ。

パンツ一枚になった事もこの清々（すがすが）しさに一役買っているのかも知れない。まさか、異世界でストリップショーをやる事になるとは、流石の俺も思わなかったぜ。

特に当てもないので、俺は適当に城の中を探索していく事にした。

「オ〜イ。誰か生存者はいないか〜」

取り合えず、声を出して生存者を探すが応答は無し。

変わりに叫び声を上げて襲い掛かってくる一つ目巨人ども。だがしかし！

「今の俺に敵^{かな}うわきゃ、ねえだろおおおおがッ！」

俺はスターアダルトを出して、速攻で反撃する。

いくら腕力があるうとも、動きがトロすぎてあくびが出そうだぜ。最早こいつらは、俺にとって雑魚同然だった。

「ひやはは。貧弱^へツ貧弱^へツ！」

手足を押し折る。頭を潰^{つぶ}す。心臓を抉^{えぐ}る。

「ウ・・・ウボアアアア！！」

ああ、断末魔の悲鳴が心地いい。

爽快感を超えて、罪悪感が沸きそうになるくらいの圧倒的強さ。まさに触手無双。

雑魚どもを蹴散らしながら城の中を進んで行くと、人の悲鳴が聞こえてきた。

声の大きさから言ってそれほど遠くはないが、俺が着いた時には死んでるかもしれないな。

まあ一応行ってみますかね。

23・後悔と引き換えに得た物（後書き）

話が全然進みません。主人公好き勝手に動きすぎ。

24・逃亡する者(前書き)

雄「前回のあらすじ。パンツ以外全部脱いだ」

24・逃亡する者

「誰か・・・助けてくれえええ・・・し・・・死にたくなあぁいいい！」

人の悲鳴が聞こえた場所に行くと、何か情けない台詞を吐いてるおっさんを見つけた。

こんな魔物の巣窟そくくつみたいな場所でよく無事でいられたな。エンカウント率どうなってるんだ？

ん？よく見るとこのおっさんの着てるローブ、ヒーティヤクソジジイが着てたローブに似てんな。

こいつも王宮魔導師ってヤツか？だとしたら、こいつからヒーティの居場所を聞き出せるかもしれない。

「オイ、おっさん」

「ヒツ、ヒイイイ！！助け・・・ごぶあつ」

怯えるおっさんの面つらが、あまりにもキモかったんで反射的に俺は蹴りをいれちまった。

まあ、ただでさえ汚らしいおっさんの恐怖で歪んだ顔を見せられたんだ。むしろ、俺の方が被害者と言っても過言じゃねえ。

取り合えず、顔を押さえて、うずくまったおっさんの襟首えりくびを掴んで持ち上げる。

「てめえに聞きたい事がある」

「！？い、いきなり何を・・・何だ魔物ではないのか。驚かせおつて・・・」

「いいから俺が聞く事にだけ答えろ！」

「わ、分かった・・・」

俺が睨にらみをきかせるとおっさんは、急に素直になった。

だったら最初からそう言えよ、クソが。手間掛けさせやがって。

「一つだけ教えてやるよ、おっさん。俺は、俺の欲望以外のために動かねえんだよ」

24・逃亡する者（後書き）

大変間があいてすみません。夏休みの宿題に追われていました。

25・下衆の在り方(前書き)

雄「おっさんを見つけた」

25・下衆の在り方

「……場所を教えるのは構わない。だが、一つ条件がある」
おっさんは俺に襟首をつかまれているにも関わらず、ふざけた事を言い出した。

「条件だあ？おっさんよお、自分がそんな生意気なクチ聞ける立場だと思つてんのか？てめえが魔法とか言うのが使えようとも、この状況じゃ俺の拳がてめえの喉潰す方が確実に速えぜ？」

クソジジイと対峙した時に、呪文を唱えるのにどのくらい時間がかかるのか覚えてる。まあ、時間つってもせいぜい二十秒程度だがこんなおっさんボコるのには十分過ぎる。

「頼む……。たいした事じゃないんだ。ただ私も連れて行って欲しい」

「は？行きてえなら、勝手に行けばいいじゃねえか。わざわざ俺に頼む意味がわからねえな」

「い、一度逃げ出してしまうと……。決心がつかなくなってしまつて、私一人では戻れなく……。ゲファッ！」

俺はおっさんを床に叩きつけた。

何、こいつ？ふざけてんのか？

「てめえよお。自分で決めた事も守れねえのか？」

「ゲホッ……。何を……。言つて……」

潰れたカエルのように、床の上で仰向けになつたおっさんに俺は淡々と言う。

「てめえで逃げるって決めておいて、良心が痛むのでやっぱ止めます。てめえの言ってる事はそう言う事だよなあ」

「・・・ああ。そうだ。確かに私は敵を前にして仲間を見捨てた臆病者だ。だが、今は後悔し・・・」

「ちつがああああああう！俺が言いてえ事はそうじゃねえ。下衆なら下衆らしく筋通せ^{すじ}つつてんだよ。改心して善人にジヨブチエンジだ〜？脳みそシケってんのか、てめえは。嘘をつくなら突き通せ！罪を犯すなら最後までやり通せ！道を踏み外^{はず}したならそのまま真っ直ぐ突っ走れ！それが『下衆道』ってモンだろうが！！」

このおっさんは下衆の風上^{かざかみ}にも置けねえクソ野郎だ。ヒーティの居場所を吐かせようと思っただがもうそんな事はどうでもいい。我慢の限界だ。

俺はスターアダルトを出現させる。

「スターアダルト！こいつを殺せえ！このカス生きる価値ねええええ！！」

スターアダルトの触手が一瞬でおっさんの頭を粉碎する。

俺は頭が砕けた死体にツバを吐きかけた。出来損ないの下衆にはお似合いの死に様だ。

とは言え、これからどうしよう。手がかりもなくなっちゃったしな。だが、俺はおっさんを殺した事は少しも後悔しちやいない。そう生き様が『下衆道』ってモンだからな。

取りあえずはおっさんが来た方向を目指すか。ちよいと地道だがそれしかねえな。

25・下衆の在り方(後書き)

話が進まない上に更新が遅れてしまいました。
主人公が自由過ぎるせいでしょうか。

26・壁は砕く物(前書き)

雄「あらすじ？俺も覚えてねえよ」

26・壁は砕く物

「行くぜ。『色欲の・・・』」
スターアダルトの触手をドリル状に絡ませる。いける。

「『ファーストブリットオオオオオツ！』」

そのまま回転しながら壁をぶち破り、突撃する。

そして勢いを殺さずに、ぶち破った壁の向こうにある壁も壊していく。

「オツシャー！ノリと悪ふざけでパクったこの技がここまでの威力とは。触手恐るべし、だな」

俺はぶち破った壁の穴を通り前にテンション上げ上げで進んだ。

数分前、いい加減この状況を打破するために俺はいろいろ考えていた。

「取り合えず現在の目的はヒーティを見つける事だが、どこにいるか分からねえ。その上、吸血鬼とか言うのと戦っているらしいから早く見つけないと死んでるかもしれねえし」

どうするべきか。城の中が複雑過ぎて、迷路みたいになってるからな。ただでさえ、俺は方向音痴なのに・・・。

「ハッ！閃いた」

ようは邪魔なのは壁。だったらそれをぶち壊せばいい。

名付けて『壁があるなら、ぶち破ればいいじゃない作戦』

グレン○ガンもびっくりなこの天元突破理論。どうよ？

そして今に至るワケだ。

「さてと、だいぶ見晴らしがよくなってきたんじゃねえかな？うん」
「じゃあ、お次はこっちの方向の壁を壊していきますか。」

「『情欲の・・・セカンドブリットオオオッ！！』」

俺の触手ドリルが壁を砕いていた先にはなんと！

「ビンゴ！やつと当たりがでたな」

そこにはさっきからずっと探していたヒーティとそして・・・なんか銀髪のイケメンがいた。

萎^なえるわ。イケメンとかないわ。しかも銀髪とか。やってらんねえ。

多分、男なら大体のヤツらがわかると思う、このイケメンにあった時の何とも言えない不快感。

確かに俺は『ハンサム』だが『イケメン』ではない。

『ハンサム』と言うのは、内面から溢れてくる魅力みたいなものだ。対して『イケメン』と言うのは、ただ単に顔面の造形が整っているだけのもの。

正直言つて気に食わねえ。生理的に受け付けない。見てるだけで殴りたくなってくる。

だから、俺は。

「スタアアアダルトオオオ！！その頭の頭を吹き飛ばせええええッ
！！！！」

有無を言わず速攻で攻撃した。

俺に迷いはなく、躊躇^{ちゆうちゆう}もなく、自制心もなかった。

スターアダルトの触手はまるで鞭のようにしなり、空気を引き裂いた凄まじい破裂音させながら、イケメンの顔を破壊した。

『スイカ割りで割られたスイカ』と化したイケメンの頭は胴体から離れる。胴体はそのまま後ろに倒れた。そして、ゴシャッと鈍い音がして、俺から向かって反対側の壁に激突した。

「お嬢ちゃん。俺とちよつとお話しようぜえ？」

俺は、驚いた表情のまま、固まって動かないヒーティの肩にポンと優しく手を乗せた。

さて、この女をどうやって陵辱してやるうかと、下衆な考えを巡らせていた。

その時、声が聞こえた。

「ほう。これが今回の勇者の『守護精霊』ガーディアンの力と謂う訳か。成る程、中々の威力だ」

俺でも、ヒーティでもなく、よく見たら転がっていた王宮魔導師どもの死体からでもなく、俺から向かって反対側の壁の方から。

俺が今さっき吹き飛ばしたイケメンの頭がある方向から。

嫌な予感がしたが、俺は声が出た方を向いた。

「ふむ。流石だな、勇者よ。我が首を刎ねられたのは実に四百年ぶりだ」

やはりと言うべきか、声の主はイケメンの生首だった。

え？これなんてホラー？ファンタジーじゃなかったけ、これ。

26・壁は砕く物（後書き）

文化祭や修学旅行のため更新が大変遅れてしまったことを深くお詫
びします。

これからはなるべく間が空かないようにがんばりたいと思います。

27・喧嘩は売るもの、そして買うもの(前書き)

雄「あらすじ？俺も忘れたわ」

27・喧嘩は売るもの、そして買うもの

「それにしても問答無用で首を刎ねるとは、些か作法がなっていないのではないのか？勇者よ」

今、俺の目の前で饒舌にしゃべっているのは生首だった。

俺がスターアダルトの触手で頭を吹き飛ばしたはずのイケメンの生首。

ありえねえ。いくら異世界だからって、頭だけになっても生きてるとか生物学的にありえねえよ。

だが、俺は末堂雄。ビビるなんて言葉は俺のウィキペディアには編集されちゃいねえ。どんな相手にもナメ腐った態度で挑む。それが俺のポリシーだ。

「はあく？頭だけで人様と会話するのがお上品な作法なのかよ。まあ、ちゃんと『目上の者』を見上げて話せてるのは、ちょっぴりほめてやらねえでもないけどなあ」

一瞬でイケメン生首野郎の余裕ある表情が歪んだ。

「『目上の者』、だと？」

「ああ？俺が『目上』でてめえが『目下』だろうがよ。何当たり前の事聞いてんだ。馬鹿か？」

俺はため息を吐きつつ、挑発する。

何があるつとも相手を全力で挑発、それがタケシズムだ。

「なあ、生首野郎。話変わるがてめえ、サッカーって知ってるか？」

「……何の話だ？」

「知んねえのか。じゃあ、今から実演してやるよ。俺がストライカーで……てめえがボールだ!!」

俺は、イケメン生首の方に駆け寄ると、思い切り蹴り飛ばす。壁にぶち当たり激しくバウンドする生首。だが、まだまだ俺は止まんねえよ。

「相手の頭をシュートツ！超エキサイティング!!」

散々蹴り飛ばしまくった後に、強烈なトウキックをぶちかます。

「どうだ？これでサッカーの面白さ伝わったか？」

グシャグシャにひしゃげて、イケメンだった頃の面影もなくなった生首ボールに笑いながら問いかける。俺をナメたら、どうなるかきちっと教えてやっただぜ。

「……す……口す……ころす殺す殺す殺す殺すぶち殺してやるぞ!!人間風情がツ!!」

低く潰れた声と共に原型を留めていなかった生首が、再び元のイケメンフェイスに戻って行く。

この光景は……シエリスの時と似てる。もしかしてあいつが言っていた『神様』ってこいつのことか？
随分ずいぶん、チンケな神様だな。オイ。

「誰が誰を殺すって？もちろん、『俺』が『てめえ』をだよなあ？」

化け物風情が」

喧嘩なら買っ。その相手が化け物だろうと何だろうとカンケーねえ。俺を怒らせたカスどもが、今までどうなっていったのか。その身で確かめてもらっぜ。

27・喧嘩は売るもの、そして買うもの（後書き）

大更新が遅くなってすみません。正直に言うと忘れていました。これからも見ていただけるのなら、できる限り頑張らせていただきます。

28・その生首、情緒不安定につき（前書き）

雄「あらすじ。イケメン生首がキレた。カルシウムとってる〜？」

28・その生首、情緒不安定につき

「殺す。殺してやるぞ、勇者ー!!」

「殺す殺すって、てめえはこのマンモーニだよ。もっとボキャブラリー増やそうぜ?」

俺におちよくられてプツンしちまったイケメン生首（本名不明）。
てか、首だけで凄すごまれても、ねえ?

正直、言なって慣れてくるとギャグにしか見えねえよ。滑稽こっけい過ぎて同情すらできる。

「なあ。それよりも聞きたいことがある。シエリスっつーメンヘラお姫様を化物にした『神様』ってのは、てめえか?」

「・・・ああ、この国の女王のことが。そうだ、我が戯たわむれに力を与えてやったのだ。そう言えば貴様を殺すように命令しておいたな。その様子だと失敗したようだが・・・クククツ、許せないか?まだ幼い少女を利用したこの我が?」

イケメン生首は嘲るように笑う。キレたり、笑ったり忙いそがしいヤツだ。
情緒不安定情緒不安定すぎる。薬でもキメてんのか?

「ああ!許せねえよ!!」

俺は、あの時の事を思い出す。許せない、許すべきではないあの出来事。

「あのメンヘラ女、俺の大切な携帯をぶち壊しやがったんだ。まあ、正確には大切だったのはその中の特選エロ画像なんだがな」

思い出したら、ムカついてきた。畜生、納得できるエロ画像が見つかるまで俺が何度ブラクラ踏んだと思っただよ。

モニターぶん殴りなぐりたくなつて、それでも諦めずに頑張つて、努力して、その結果ようやく満足ができる物になった。それをあのクソ女おんなが一瞬で、一瞬で水の泡にしやがった！

「だからよお。てめえが原因だつてんなら、ちゃんとして責任取つてもらわねえと・・・なあッ！」

俺はスターアダルトの触手をイケメン生首なまがしらに叩たたきつけようと振り上げた。

「良いのか？良く後ろを確認しなくても」「イケメンは急に思わせぶりの事を口走る。」

ハッ。そんな分かりやすいハツタリに、この俺が引つかかるとでも思つてんのか？

そのまま、振り上げた触手をイケメン生首に振り下ろそうとした直前。

「避けてください！！」「水式攻撃魔法・凍結氷槍アイスランス」
女の声が聞こえて、とつさに俺は真横に飛んだ。

そして見た。俺の背後に迫っていた首のない身体に、大きな氷柱つらなが突き刺さるのを。

28・その生首、情緒不安定につき（後書き）

やっと展開が進みそうです。

書いててなんですけど自分の思ったようにキャラが動いてくれないのが辛いです。

29・その少女、空気につき（前書き）

雄「あらずじ。イケメン生首の身体に背後から襲われた。アッー」

29・その少女、空気につき

大きな氷柱が刺さった首のない身体は、ピキピキと音をたてながら表面を氷で覆おおわれていく。

「何が起きたんだ？オイ」

意味不明の展開に驚く俺に誰かが声をかけてくる。

「無事のようですね。安心しました」

「お前は・・・ヒーティ！今まで空気だったヒーティさんじゃあ、ありませんか。どうしたの急に？そんなに目立ちたかったの？」

声の相手はなんと、もはや俺ですら存在を忘れかけていたヒーティ。そういや、こいつを探するのが当初の目的だったような気がする。だってしょうがないよ、自己主張弱いし。台詞も今までほとんどなかったし。

初対面よりさらに冷たくなった目でヒーティは俺を見る。

「貴方の言っている事は良くわかりませんが、何故かとても不快です」

くっ、美少女にそんな目で見られると基本Sな俺もゾクゾクしてきちまう。

新しい世界に目覚めようとしていた俺を他所よそにヒーティはイケメン生首に向き合う。

「今ここで勇者を失う訳にはいきません。貴方には、ご退場願います」

「やはりそちら側に回るのか。・・・所詮しよせんは御前も人間と言う事か」

うわ。なんか俺のこと無視して勝手に話し始めたよ、こいつら。
しかも露骨に意味深なこと言ってるし。

まあ、俺は空気の読める男、末堂雄。ここは一步引いて、この会話を見守るのが得策だとなんとなくわかった。

俺にはこの世界の情報がまったくと言っていいほど何もない。そもそも今、襲われている原因すらもわからねえ。

イケメン生首・・・もうこれ言いにくくてしょうがないから、あいつの名前はこれ以降、生首モゲ太しよう。そのモゲ太がスターアダルトのことを守護精霊ガーディアンとか呼んでいたのも気になる。

だがしかし！

「何だつていい。モゲ太に攻撃するチャンスだ！」

空気を讀んだ上でぶち壊す。これぞ下衆の醍醐味だいごみ。

スターアダルトの触手が唸うなる。それと同時に俺もモゲ太に向かって走り出す。

「なアツ！」

ヒーティと会話していたモゲ太を何本かの触手でがっちり掴むと、そのまま床に押し付けたまま引きずる。音を立てて、まるで肉片と血で床に絵を描くように俺とスターアダルトは部屋の中を走り回る。

「摩すり下ろしリンゴの気持ちかわかるようになるまで引きずり回してやるよ」

普通の攻撃じゃさつきみたいに再生されるだろうから、細かく細かく削って殺す。

これで復活されたら、マジどうしようもないがな。おっと自分で変

なフラグ立てるところだったぜ。

29・その少女、空気につき（後書き）

全然駄目ですね。スイマセン。

30・その結末、複雑につき

「ら〜らららららら〜」

俺は適当に歌を口ずさみながら、スターアダルトの触手で掴んだモゲ太の頭だったものを摩り下ろす。

皮膚が捲れ上がり、潰れた肉から血が滲み出て、骨がガリガリと音を立て削れて行く。

「・・・や・・・え・・・へく・・・え・・・」

下顎が完全に摩り潰れているにも関わらず、モゲ太は俺に喋りかけてきた。首だけになった時も思ったが、こいつどうやって声出してるんだろう？

「オイオイ。最初に俺に話しかけてきた時のカリスマはどうこいちゃったワケ〜。せめてさ、死ぬ時ぐらいかっこつけて死のうぜ？」

「・・・ひあ・・・ら・・・ひ・・・はふな・・・い・・・」

何いってんのか良く分からないが、多分「嫌だ。死にたくない」って言うてんだろう。アワレだ。むしろ、ここまで行くと無駄に不死身なのが辛いだろうな。

イケメンだった顔をも今は鼻がなくなり、頬骨が飛び出していて酷いことになっている。まさに一皮剥ければ何とやら、だな。いや、それは意味違うか。

「駄目だ。てめえは殺す。確実に、絶対に、完璧に、妥協せず殺す。それにてめえは俺を殺しに来たんだろーが。殺しにきてるヤツは殺される覚悟がなくちゃ駄目なんだよ。それとも自分は絶対死なないとでも思ってたのか？だったらその思い上がりはここで終了だな、てめえと一緒に」

話ながらも手を動かす。

最初はガリツだった音が、ゴリツという音に変わり、最終的にはゾリユツという音になった。

触手を通して伝わってくる感触も硬いものを削る感じから、柔らかいものを潰す感じに変わっていく。

モゲ太の目、と言ってもほとんど潰れてグチャグチャになって頬ほほの皮膚と混ざりあった部分から、血に混じって涙らしきものが流れて始める。

単なる生物としての痛みによる生理現象か、俺に蹂躪みじみじされている屈辱からのものか、それとも死に対する恐怖からか。

まあ、どれであれこいつが最高に無様であることに変わりはない。

「……ひい……ふい……はふ……へへ……く……え……」

「

やっぱりよく分からないが、俺に命乞いをしたのとは違うように聞こえた。

そうすると、こいつはヒーティに助けを求めているんだろう。他に誰もいないしな。

「オイ、ヒーティ。俺はこのままコレを跡形もなくすり潰してもいいんだが、最後はお前にコレをどうするか選ばせてやるよ」

俺はヒーティにモゲ太の最終決定権をくれてやった。

「……」

ヒーティは何も言わず、ただモゲ太の前にきて立ち止まった。

さあ、どうする？俺の見立てでは、モゲ太とヒーティはわりと親密な仲だったと思う。

先ほど会話が何よりの証拠だし、最初に俺がこの部屋に来た時も、他の人間は全員殺されていたにも関わらずヒーティだけが生きていたのも良く考えればおかしい。

ここにいるヤツらは一応皆王宮魔導師とかいうのらしいが、ぶつちやけ呪文を唱えられないほどの接近戦に持ち込めば勝てない相手ではない。すでに二人殺してる経験者の俺が言うのだから間違いない。だが、モゲ太があえて殺さなかったと考えると考えれば納得できる。

モゲ太とヒーティがどんな関係かは知らない。でも恐らく、殺したら確実に心にダメージを負う。それだけは分かる。

だからこそ、ヒーティにやらせる。理由は一つ、見てて面白そうだから。

「・・・わえ・・・を・・・はふ・・・へへくえ・・・」

無様なモゲ太くんは期待するように、潰れたオメメでヒーティちゃんのことを見上げています。

「・・・ツ」火式攻撃魔法「・・・」

ヒーティちゃんは苦しそうに表情を歪めて喉のどから声を絞り出して、

「灼熱火球（ファイヤーボール）!!!」

呪文を唱え、モゲ太くんを大きな火の玉で焼き払いました。そしてモゲ太くんは跡形もなく蒸発しましたとき。めでたしめでたし。

いや〜。やつぱいいいね。美少女の泣きそうな顔は。そそられるわ〜。

「で、どう？浅からぬ仲のヤツを殺やっちゃた感想は」

俺が晴れやかな笑顔で聞いてやるとヒーティは一瞬驚いた表情を作った後、俺を睨にらみ付けた。

「・・・解とけてやらせたんですか？」

「ん〜？何のことかな。俺はお前にそこら辺に転がってる王宮魔導師たちの仇かたきを討うたせてやっただけだぜ？」

ヒーティは端正な顔を激昂げっこうしかけるのを耐えるように低い声で尋ね

た。

「・・・あなたは本当に勇者なんですか？」

俺はそれに笑いながら答えてやった。

「勇者あゝ？ 違いよ、俺は生まれながらのエンターテイナー下衆野郎だ」

30・その結末、複雑につき（後書き）

やっと物語つぽくなってきました。ここまでぜんぜん進まなかったんで辛かったです。

31・溢れ出る感謝(前書き)

雄「あらすじ。モゲ太 完全消滅」

31・溢れ出る感謝

「父にありがとう！母にありがとう！全ての^{チルドレン}子供達にありがとう！」

思わず感謝の声が出てしまった。

いや、それにしても素晴らしい気分だ。最高にハイってヤツだぜ。

俺、末堂雄はこの異世界で童貞を捨てた！しかもレイプで！！

それでは、被害者の方にインタビューをしてみましよう。

「どうですか？無理やり身体を陵辱された感想は？」

スターアダルトの触手に吊るされているヒーティに、うざい記者のように質問する。

ヒーティは答えない。

目から光を失ったように瞳孔が開いていた。もちろん、殺してはいない。生物学的には。

まあ、精神の方はひよっとしたら、ぶっ壊れてるかもしれないけどな。

うつむいているため特徴的な青と水色の中間色のような髪が、陶器のような白い肩にかかっている。

王宮魔導師であることを示すらしい紺色のローブは引きちぎれ、中にきていた服や下着も破かれていた。と言うか俺が破いた。

「おいおい、完璧に壊れちゃったのか？もしもくし。聞いてるか？」
頬を軽くペチペチ叩くが反応は返ってこない。

まったく柔^{やわ}な女だ。四、五回^{なか}臆に出したぐらいで放心しやがって。

「……たは……」

ヒーティはうつむいていた顔を上げて、俺に何か^{つぶや}呟いた

「ん？」

ようやく何かしらの反応を見せたか。

「貴方は……最低の人間です……」

そう吐き捨てる俺を睨みつける。

堪らず、笑いがこみ上げてきた。

「ヒヤハハハハハハハハハハ！最低？俺が？おいおい、俺にそんなちんけな言葉で表現すんじゃねえよ。俺は、凶悪犯罪者を何人も輩出して末堂家の直系だぜ？馬で言えばサラブレッド。血統書付きってヤツだ」

「何故……？何故貴方のような人間が勇者なのですか！？」

はあく何言い出すかと思えば、この嬢ちゃんは。

「あのな、言つとくが俺も来たくてこの世界にきたワケじゃねえかな？お前らが勝手に俺を拉致つてここに連れてきたんだろ？被害者は俺の方なんだよ。そこんとこちゃんと理解してくれてる？どうつゆうあんだーすたんどろ？」

引き裂かれた服の隙間から手を突っ込んでヒーティのおっぱいを揉みしだく。

「！？んっ……」

俺に急におっぱいを触られたせいで悩ましい声を上げるヒーティ。でかい。そして、何より柔らかい。

さっきまで俺にレイプされていたせいで、少し汗ばんでいる。

「やめっ……ください……」

涙目で睨まれても、少しも怖くない。むしろ、ゾクゾクする。

「それによお。お前も俺のことを利用しようとしてたんだろ？」

王宮魔導師とか名乗りながら、こいつは最初からこの城に大してこだわってなかった。

俺がファッキングを殺そうとして、兵士から剣を奪って襲い掛かった時も一番近くにいたにも関わらず、こいつは止めなかった。

もっと言つたら本来こいつの上司にあたるはずの、俺をこの世界に拉致った張本人のクソジジイ・・・名前なんだっけ？まあ、いいや。そのクソジジイを殴り倒した時も全く慌てていなかった。そもそも、魔物であるモゲ太と面識があったっけか、かなり親しかったみたいだし。

「ま、何にしても俺は誰の思い通りにもならねえよ。俺がすることはただ一つ」

ヒーティのおっぱいを揉んでいた手を放して、一指し指を天井に向けて俺は宣言する。

「勝利して陵辱する。ただそれだけだ。今のお前みたいにな」

31・溢れ出る感謝（後書き）

R18じゃないので過程はキンクリしました。

32・はじめてのおでかけ(前書き)

雄「あらすじ。道程卒業」

32・はじめてのおでかけ

「じゃあな。処女、ご馳走さんでした」

いやはや、まさか処女だったとは、思わなかったぜ。

ヒーティを拘束していたスターアダルトを消すと、俺はヒーティに背を向けて歩き出す。

もう、ここには用はない。次はどこに行くかな？

当初の予定は宝物庫にでも行って金目のものでも貰っていくかと考えたが、それだと何かとかさ張るだろう。貨幣に至^{いた}っては、王国がこれじゃ貨幣制度自体が機能しなくなった恐れがある。

つーか、腹が減った。そういや、元の世界でエロゲ買ったために飯代ケチってたから、碌^{ろく}なモン食ってなかったんだよな。この城の食料庫は・・・考えるまでもねえか。

「待って・・・下さい」

「あん？」

振り返るとヒーティが立ち上がるうとしていた。

足が生まれたての小鹿^{ハンピ}のようにプルプルと震えている。そりゃ、あれだけヤられたら足腰立たねえだろうな。

「あんだよ？せつかく見逃してやるつつうのに俺に盾突こうつての
か？この距離なら、お前が呪文を唱える前にお前を『レンコン』さんにして『お弁当箱』に詰めるくらいワケねえぞ」

それに俺のスターアダルトの触手には魔法が撃たれる前触れが文字通り『感じ取れる』。多分、この異世界に来て、俺の第六感が以上に鋭くなったのもそのせいだ。

だから、こいつが俺に不意打ちしようともまったく問題はない。だが、ヒーティの返答は俺の予想とは異なるものだった。

「違います。貴方はこの城から出て行くのでしょう？だったら、私も連れて行ってください」

こいつは何言ってるんだ。

自分を無理やり犯した相手に一緒に連れけだど？犯され過ぎて壊れたか？精液が脳まで到達したのか？

結論「こいつは頭が可哀想なことになった。

「故郷へ帰るんだな。お前にも家族がいるのだろう」

俺はヒーティに田舎で養生することを進めた。まあ、こいつの故郷が田舎かどうか知らないけど。

俺は反骨精神バリバリのヤツをイジめるのが好きなわけであって、壊れた女に興味はない。

そつだ。こいつに出口を聞くか。いくら壊れててもそのくらいのことは答えられるだろう。

「オイ。出口って」

「・・・いませんよ」

俺が質問する前にぼそりとヒーティは呟く。

「家族なんて！私にはいませんよ！！」

そう言うのと陵辱中にも見せなかつた涙をぼろぼろこぼし始めた。

あゝあ、何か変なスイッチを押してちまったみたいだな。こりゃ駄目だわ。さすが情緒不安定。

めんどくさいので、無視する。

仕方ねえ。地道に壁を破壊して行って外に出よう。例え、今いる場所が高い位置あったとしてもスターアダルトがある今の俺ならどうにかなる。

まず初めにこの部屋の壁を破壊するか。
スターアダルトを出して、2、3本の触手で思い切り壁に叩きつける。

バゴンと鈍い音と共にあっさりと壁が崩れ落ちる。崩れた壁の間からは陽の光と外の光景が広がる。

何だ。わりと簡単に見つけられたな。

外はまだ明るく、俺の感覚では昼ぐらいだろう。地面からこの場所までの高さは大体十五メートルくらいだ。

「うっは、酷^{ひで}えモンだな」

地面は化け物と死体であふれかえっていた。

俺はさほど躊躇なく（ちゅうちょ）飛び降りた。スターアダルトで受身を取るように触手を地面に叩きつける。跋扈^{はっこ}していた牛のような魔物をついでに巻き込み、ミンチに変えた。

死体を食べていた魔物共は一斉に俺に注目する。

「俺より先にランチタイムとはいいい度胸してんじゃねえか」

32・はじめてのおでかけ（後書き）

どうもお久しぶりです。まだ見てくれている人がいるなら見て行ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6311j/>

その勇者、暴走につき

2011年9月17日22時50分発行